

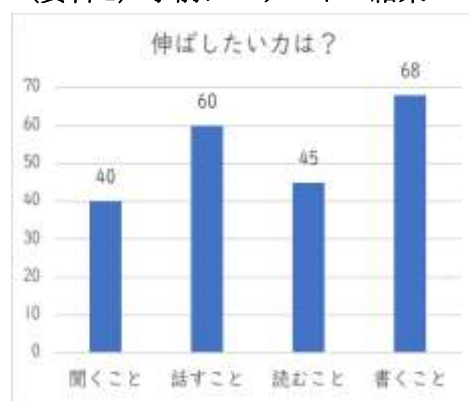
27	田原	田原市立田原中学校	スズキ アヤリ 鈴木 彩里
分科会番号	2	分科会名	外国語教育

目的や条件にあわせて英文を書こうとする生徒の育成  
 ～中学2年 英語表現を精選するライティング活動を通して～

### 1 主題設定の理由

現在、SNS やインターネットを通じて、誰もがグローバルなやりとりをすることが可能になっている。自分の考えや思いを世界に発信することが容易になった今、英語を用いて自分の考えを伝えるスキルが必要である。そして現代社会では、機械や生成 AI による翻訳が普及している。機械や生成 AI による翻訳を利用する場合には、使用場面に合った英文になっているか確かめたり、必要に応じて修正したりするなど、目的や条件にあわせて英文を書く力が必要であると考えます。

(資料1) 事前アンケートの結果



研究を進めるにあたり、年度当初に、担当する生徒 101 名にアンケートを実施した。「今年度の英語の授業を通して伸ばしたい力(複数回答可)」についてたずねると、約 7 割の生徒が「書くこと」をあげていた (資料 1)。この結果から、生徒は書く力を伸ばしたいと考えていることがわかる。以上を踏まえて、本研究では、「目的や条件にあわせて英文を書こうとする生徒の育成」という主題を設定した。

### 2 研究の目標

#### 【目指す生徒像】

目的や条件にあわせて英文を書こうとする生徒

### 3 研究の仮説と教師の具体的な手だて

#### (1) 仮説

##### 【仮説Ⅰ】

課題の設定を工夫すれば、英文を書きたいという気持ちを高めることができるであろう。

##### 【仮説Ⅱ】

用いる英語表現を精選する場を設定すれば、英文を書く力を高めることができるであろう。

#### (2) 教師の具体的な手だて

##### 仮説Ⅰに対する手だて①「書く活動の課題設定の工夫」

読み手が理解しやすいように、英文を書く必要性が感じられるような課題を設定する。本単元の導入では、ALT との対話を行う。日本に住んでいる ALT の困り感を生徒に伝え、「外国の方に日本のルールを知ってもらうにはどうしたらよいか」という課題を設定する。そうすることで、生徒は日本に不慣れな ALT のために英文で日本のルールを伝える必要性を感じ、英文を書きたいという気持ちを高める。

##### 仮説Ⅱに対する手だて②「用いる英語表現を精選する場を設定する」

互いの英文を読んでフィードバックしたり、考えを交流したりする場として「Chat THR」

の活動を設定する。「Chat THR」では、グループごとにイラストに合った英文を考え、タブレットを用いて Google フォームに入力する。スプレッドシート上に集約された英文を互いに読み合い、用いる英語表現を精選しながらよりよい英文を創作していく。本単元では、日本の学校と家庭のルールをテーマに、「Chat THR」の実践を3回行い、英文を書く力を高める。



#### 4 研究の計画

##### (1) 抽出生徒について

生徒 A は、授業内での活動に真剣に取り組んでおり、グループ活動において考えを共有する場面では、意見を自分から伝えようとする姿が見られる。一方で、年度当初に実施したアンケートに「話したり、書いたりすることなど、思ったことを英文にすることが苦手なので、克服できるようにしたい。」と記述していた。書くことに対して苦手意識をもっているため、書く力をつけていきたいという思いがある。

##### (2) 計画

段階	○学習活動 ・生徒の考え	教師の手だて
自分事化する	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">日本の学校のルールは海外と同じ?①</div> <p>○学校のルールについて、日本とALTの出身国を比べるクイズを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アメリカは自由度が高くてびっくり。</li> <li>・日本とスリランカのルールは似ている。</li> <li>・自由度が高いのはうらやましいけれど日本のルールにもよさがある。</li> </ul>	<p><b>解決する必要感のある課題を設定する</b></p> <p>日本のルールを英語で伝えたいという気持ちを高めるために、日本を訪れる外国人に向けて紹介するという課題を設定する。(手だて1)</p>
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">海外には、どんな家のルールがある?②</div> <p>○家のルールについて、日本とALTの実家を比べるクイズを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・国によっても、家庭によっても</li> <li>・アメリカは日本と違って、ごみをさまざまなルールがある。 分別しないと知って驚いた。</li> </ul>	
考えを構築する	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">どんなルールを伝えようかな③</div> <p>○日本を訪れる外国人に伝えたいルールをグループごとに考える。</p> <p>○伝えたいルールをイラストで表す。</p>	<p><b>再構築のための基準を示す</b></p> <p>よりわかりやすい英文にしたいという意識を高めるために、再構築のための基準を全体で共有する。(手だて2)</p>
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">Chat THR「田中<sup>たちゅう</sup>のルールを教えて!」④</div> <p>○イラストを見て、グループごとにその内容を表す英文を考える。</p> <p>(A) Students have to clean their classroom by themselves. (B) Students come to school by eight.</p> <p>○各グループが作った英文を読み比べ、共通点や違いを見出す。 ○よりわかりやすい英文にするための基準を共有する。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>・単文にする ・簡単な単語を用いる ・絵の内容に合っているか!</p> </div> <p>○グループでの話し合いや再構築の基準をもとに、個人で英文を書き直す。</p>	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">Chat THR「家のルールを教えて!」⑤⑥</div> <p>○イラストを見て、グループごとにその内容を表す英文を考える。</p>	

考えを更新する	A	B	<p>英文を共有する場を設ける</p> <p>他者の考えをもとに自分の考えを見直すために、自分の考えた英文をスプレッドシート上で共有し、フィードバックする場を設ける。(手だて2)</p> <p>個人で英文を書き直す場を設ける</p> <p>よりわかりやすい英文に仕上げるために、話し合いをもとにして英文を精選したり書き直したりする場を設ける。(手だて2)</p>
	 ①We have dinner at six. ②You have dinner at six o'clock with your family.	 ①You mustn't wash yourself inside the bathtub. ②You have to wash your body outside the bathtub.	
<p>○各グループが作った英文を読み比べ、共通点や違いを見出す。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">よりわかりやすくなるように、もう一度英文を書き直したい</p> <p>○グループでの話し合いや再構築の基準をもとに、個人で英文を書き直す。</p> <p>・ You have dinner at six. 短くまとめられているから、この英文にした。</p> <p>・ You have to wash yourself outside the bathtub. 誰にでも通じるような単語を使った。</p>			

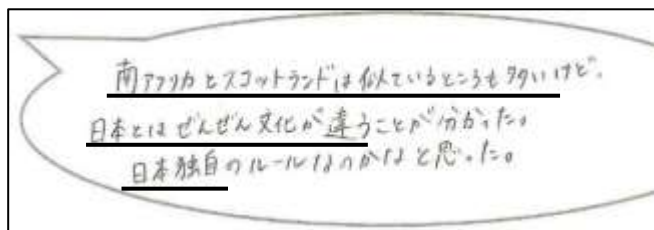
## 5 研究の実際と考察

(1) 英文を書きたいという気持ちを高める生徒

手だて1 書く活動の課題設定の工夫

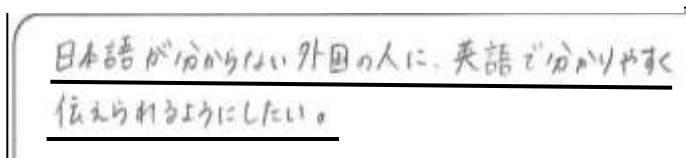
単元の導入として、ALTの出身国と日本の文化を比べる活動を行った。本校には複数のALTがローテーションで来ているため、各ALTの出身国と日本の学校や家庭のルールについて、クイズ形式で比較した。各国のルールが日本と同じであるか予想し、答え合わせをする。これまで「外国」という大まかな区分の中で文化の違いを捉えていた生徒たちは、アメリカ・スリランカ・スコットランド・南アフリカなど国による違いを知った。生徒Aは「南アフリカとスコットランドは似ているところも多い」「日本とはぜんぜん文化が違う」と記述し、各国の文化について比較していることがわかった(資料2)。生徒Aのように「日本独自」のルールや文化があることに気づき、「外国の方は日本に来て困っていないのか」「日本の文化がわからなくても生活できるのか」という疑問をもつ生徒がいた。そこで、日本での生活に慣れていないALTに話をしてもらった。南アフリカ出身のALTは、文化の違いが大きく、日本語も

(資料2) 生徒Aの振り返り



あまりわからないため、日本での生活に困っていると生徒に話した。特に、日本ならではの習慣やルールがわからず困っていることを知った生徒たちは「言葉も文化もわからないことが多くて大変そうだ」「外国で生活することの難しさがわかった」と感想を述べた。そこで「日本を訪れる外国人に日本の学校や家庭のルールを知ってもらうにはどうしたらよいか」という課題を生徒に提示した(手だて1)。この課題を受けて、生徒からは「外国とは違う日本独自のルールがあるから、それを英語で伝えたい」「日本のルールを伝えることで、外国から来て困っている人を助けたい。」という意見が出た。生徒Aは「日本語がわからない外国の人に、英語で分かりやすく伝えられるようにしたい」と記述した(資料3)。また、教師が生徒A

(資料3) 生徒Aの振り返り



にその理由を尋ねると、「日本の生活に慣れていなくて困っていると思うから助けになりたい。まずは英文を作ることが大切だと思う」と答えた。このことから、日本に不慣れな外国の方のために英文を書きたいという気持ちを高めていることがわかった。

(2) 英文を書く力を高める生徒

手だて2 用いる英語表現を精選する場を設定する


第4時から第6時に「Chat THR」を行った。1回目の実践(第4時)では、「日本の学校のルール」をテーマにした英文作りに取り組んだ。はじめに、生徒たちはグループごとにイラストに合った英文を考えた。生徒Aのグループでは、「Don't eat を使えそうだ」「食べ物は food でいいよね」と文法や単語を確認し合いながら英文を考えていた。次に、各グループが Google フォームで送信した英文をスプレッドシートに集約し、読み合っってフィードバックをする時間を設けた(手だて2)。生徒Aのグループは“Don't eat food.”と入力していた(資料4)。生徒からは「Don't が多く使われている」という意見が出たが、英文の類似点や違いについて比べている様子はほとんど見られなかった。英文を読み合った後、生徒たちは英文を書き直した。生徒Aは、どのように書かしばらく悩む様子を見せたが、他の班の英文を見ながら“Don't eat and drink.”とワークシートに書きこんだ。教師が、この英文を選んだ理由を問うと、生徒Aは「なんとなく選んだ」と答えた。この返答の様子からは、英文を選ぶ基準がわからずに、自分の感覚で主観的に英文を選択しており、英文を書く力が高まっていないことがわかる。

英文を選ぶ基準を共有するために、2回目の実践に入る前に、「よりわかりやすい英文にするにはどうすればよいだろうか」と生徒に投げかけ、考えを交流する場を設けた(手だて2)。生徒からは「英文が長すぎるとわかりづらい」「難しい単語を使わないほうがよい」「習った単語や英文をできる限り使う」などの意見が出た。それらの意見をもとに、「単文にする」「簡単な単語を用いる」「絵の内容に合わせる」という3つの基準を設定した。

2回目の実践(第5時)では、1回目とイラストを替え、再び「日本の学校のルール」について英文作りに取り組んだ。生徒Aのグループは「8

(資料4)

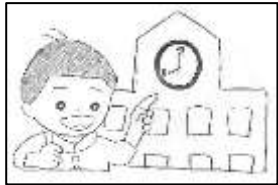
イラストと各グループが考えた英文



Don't eat here.	
Don't eat and drink	
You must not eat at school.	
<b>Don't eat food.</b>	
↑生徒Aのグループ	
We must not eat at school.	
Do not eat or drink	
Don't have something to eat.	
don't eat anything to during class.	
You must not bring up foods in school.	
You don't must eat.	

(資料5)

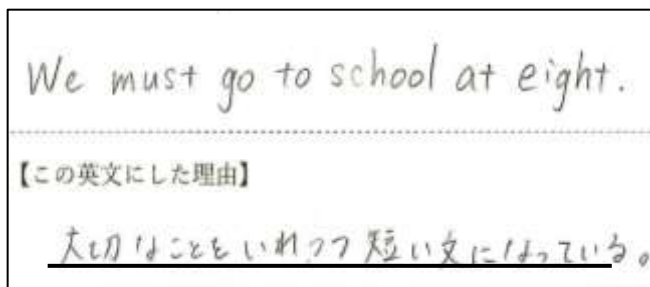
イラストと各グループが考えた英文



we have to go to school by eight o'clock.	
We have to go to school by eight o'clock.	
We have to be in the classroom at eight.	
<b>We must in school at eight</b>	←生徒Aのグループ
Must enter the room before 8 o'clock	
We must go to school at eight.	
Must enter before 8am	
We must come by 8 o'clock in school.	
At eight in the classroom.	
We must come to school at eight.	
We have to go to school at 8:00	

時入室」を表すイラストを見て “We must in school at eight.” という英文を作った (前項資料 5)。その後、よりわかりやすい英文にするための 3 つの基準をもとに、英文を読み比べた。他の生徒とフィードバックをし合う中で、生徒 A は「must in だと、動詞がなくてわかりづらい」というフィードバックを受けた。フィードバックを受けた生徒 A は、ワークシートに “We must go to school at eight.” と英文を書き直した (資料 6)。生徒 A がフィードバックをもとに、“must in school” と書いていた部分を “must go to school” と書き換えたことがわかる。また、理由として「大切なことをいれつつ短い文になっている」と記述していた (資料 6)。また、教師が生徒 A に「大切なこと」とは何かを教師が問いかけると、「絵の内容に合わせるために “go to school at eight” が必要で、ルールだから “must” がいると思った」と答えた。生徒 A の記述と、教師の問いに対する返答から、生徒 A が「単文にする」「絵の内容に合わせる」という基準を意識したことがわかった。生徒 A が、よりわかりやすい英文にするために英文を書き直していることから、英文を書く力が高まっているといえる。

(資料 6) 生徒 A のワークシート



3 回目の実践 (第 6 時) では、「日本の家庭のルール」をテーマに英文作りに取り組んだ。生徒 A は、グループでの英文作りにおいて、イラストを見ながら “Don't sing at night.” という英文を作った (資料 7)。グループでの英文作りの後、前時で設けた「よりわかりやすい英文にするための 3 つの基準」を全体で共有した。その後、フィードバックをする場を設けた (手だて 2)。生徒 A のグループでは “Be quiet” って静かにしてって意味か。こっちのほうがよさそう」「命令文が多い」「単語も習ったことが多く使われている」と、意見を交流する様子が見られた。生徒 A のグループの英文に対して、他の生徒から「単文で書かれていてわかりやすい」「“Don't sing” だと「歌わないで」だけになるから場面が限定されるかもしれない」などのフィードバックがあった。フィードバックの後、生徒 A はワークシートに “Be quiet at night.” と書き直した (資料 8)。また、この英文にした理由として「夜は静かに、と短い文で書かれている」と記述した。この生徒 A の記述からは「よりわかりやすい英文にするための基準」をもとにして「短い文」で書くことを意識していることがわかる。また、教師が生徒 A に “Don't sing” から書き換えた理由を尋ねると、「B さんがさっき教え

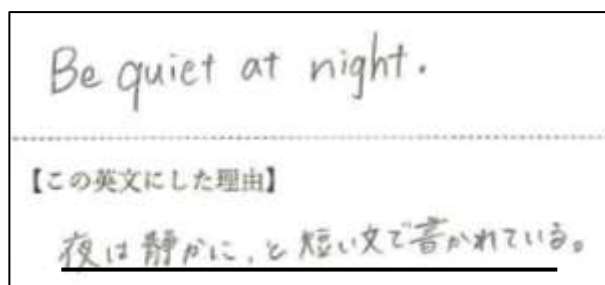
(資料 7) イラストと各グループが考えた英文



イラストの内容を英文で表そう!

Be quiet at night.	
Be quiet at night.	
Don't be noisy at night.	
Don't sing at night.	←生徒 A のグループ
Don't be noisy at night	
Don't make the noise too loud	
you must be quiet at night	
We must sound noisy.	
Don't make noise at night.	
You must not make a noise late night.	
You mustn't big sound at night.	

(資料 8) フィードバック後の生徒 A のワークシート

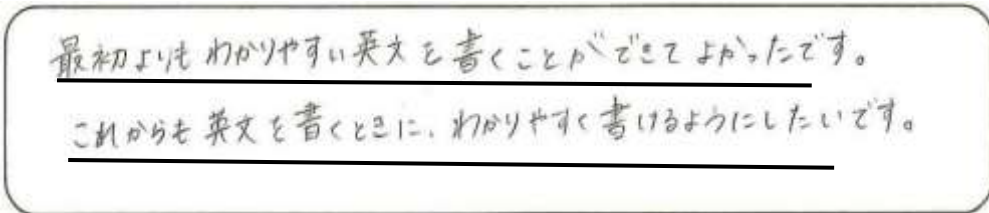


てくれて、「Don't sing」だと歌だけになるから『静かに』って書いたほうがわかりやすく伝わると思って」と答えた。この返答から、生徒Aが、他の生徒からの「Don't sing」だと場面が限定される」というフィードバックを参考にして「Don't sing」の部分を「Be quiet」と書き換えたことがわかる。

3回目の実践を終えて、生徒Aは振り返りを書いた(資料9)。生徒Aの「最初よりもわかりやすい英文を書くことができてよかった」という記述から、生徒A自身もわかりやすい英文を書くことができたという実

感を得ており、生徒Aの英文を書く力が高めることができたといえる。

#### (資料9) 生徒Aの振り返り



## 6 研究の成果と課題

### (1) 仮説Ⅰについて

「日本を訪れる外国人に日本の学校や家庭のルールを知ってもらうにはどうしたらよいか」という課題に対して、生徒Aは、資料3のように「日本語がわからない外国の人に、英語で分かりやすく伝えられるようにしたい」と記述した。また、その理由として「日本の生活に慣れていなくて困っていると思うから助けになりたい。まずは英文を作ることが大切だと思う」と答えた。単元の導入においてALTとの対話を行い、生徒Aは、ALTの出身国と日本の文化の違いや日本の生活に不慣れなALTの困り感を知ることで、日本に不慣れなALTや外国のために日本のルールを英語で伝える必要性を感じ、英文を書きたいという気持ちを高めることができた。よって手だて①は有効であり、仮説Ⅰは妥当といえる。

### (2) 仮説Ⅱについて

生徒Aは「Chat THR」1回目の実践において、何を基準に英文を選ぶかわからずに自分の感覚で英文を選択していた。しかし、2・3回目の実践では資料6・8のように、基準やフィードバックをもとに、よりわかりやすい英文にしようと英文を書き直していた。また、生徒A自身も資料9のように「わかりやすい英文を書くことができてよかった」と振り返った。「Chat THR」での11種類の英文作りに取り組み、生徒同士が英文を読み比べてフィードバックを合ったり、考えを交流したりすることで、英文を書く力を高めることができた。よって手だて②は有効であり、仮説Ⅱは妥当といえる。

### (3) 課題

「Chat THR」の活動のゴールとして、実際にALTや日本に不慣れな外国の方に向けて、生徒が作った英文を発信したり読んでもらったりする機会を設けていれば、生徒は英文が本当に伝わるかどうか確かめることができただろう。今回の実践では、授業時数の都合により、英文を発信したり読んでもらったりする時間を確保できていなかった。今後は見通しをもって年間計画や単元の計画を立てるようにしたい。